

「怖くなるほどの救い」

マタイによる福音書 8:28-34
イザヤ書 43:19

2025年11月9日
野村 友美 師

<未知のものは怖い>

先週は召天者記念礼拝をいたしました。

今年もたくさんの方が集まってくださって、
一緒に礼拝できて本当に感謝でした。

そして今日はこの後、子ども祝福式を予定
しています。

私たちに命を与え、育み、それぞれの人生を
導いてくださる神様のスケールの大きさを
改めて思わされる2週間です。

さて、子どもでも大人でも、それぞれに何か
「怖い」ものがあるだろうと思います。

皆さんは何が「怖い」ですか？

虫が怖い、暗いところが怖い、テストが怖い、
友達と喧嘩するのが怖い、車の運転が怖い、
病気になるのが怖い、家族に何かあるのが怖い、
これからの社会情勢が怖い。

いろんな「怖い」がありますが、その多くは
「どうなるかわからない」という怖さなん
じゃないでしょうか。

まだ知らないこと、出会ったことがないも
の、体験したことがない出来事は、多かれ少な
かれ私たちに「怖さ」を感じさせます。

目の前にあるものが、これから自分に何を
もたらすのか。出会ったらその後どうなるの
か、いったい何を味わうことになるのか。
わからないということは、何よりも私たちの

心を不安にさせるものです。

だから、よく知っている物事や状況や変
わるとき、たとえ今現在がどんなに辛かつ
たり不自由だったとしても、私たちは変化
を怖がらずにはられません。

今のままでいい、変えたくない、かまわ
ないでくれ。そう言いたくならずにはいられ
ない気持ちは、時代も国も超えて共通して
いるようです。今日の聖書の物語にも、こ
の「かまわないでくれ」という声が響いて
います。

<湖を渡ってきたイエス>

神の子、かまわないでくれ。

悪霊に取り憑かれた二人の男性が墓場
から出てきて、イエス様に向かってそう叫
びました。何だかまるでホラー映画の一場
面のようですね。

イエス様と弟子たちの一行は、ガリラヤ
湖の向こう岸から舟に乗って、嵐をくぐり
抜けて、ガダラ人の地方にやって来ました。
イエス様たちユダヤ人から見れば、そこは
異邦人の土地です。違う宗教を土台にして、
違う文化を生きている異邦人は、ユダヤ人
たちの律法では「汚れた人々」、つまりでき
るだけ関わりたくない人たちでした。
しかも、どうやらイエス様たちの舟がつい
た場所は、墓地に近いところだったよう
です。「人の死体に触ると汚れる」と律法で決
められていましたから、ユダヤ人にとって
は墓地もできるだけ近づきたくない場所
だったでしょう。悪霊に取りつかれた人た
ちがいる、異邦人の墓場。

「清い」と思えるものは何一つない、できれば近づきたくないし関わりたくない。そんな場所を目指して、イエス様はわざわざ湖を渡って来られたのです。

どうすることもできない状況に苦しんでいる、二人の人を救い出すために。彼らは非常に狂暴で、誰もその辺りの道を通れないほどだった、と福音書はこの悪霊に取り憑かれた人たちの様子を伝えています。

二人に近づくことはもちろん、傍の道を通り過ぎることもできない。それは、かなり深刻な状態だったと言っていいでしょう。

つまり彼らは、人を見つけたらすぐに寄ってきて、襲いかかっていたということです。周りの人たちもこの二人を持て余して、できる限り近寄らないように、関わらないようにしていたのでしょうね。

もちろん彼らだって、暴れたくて暴れていたわけではなかったはず。悪霊に支配されて、自分で自分をどうにもできない。誰も自分たちに近寄って、関わろうとはしてくれない。誰にも理解されないし、誰にも受け入れられない。それはどんなにか辛くて、悲しくて、寂しいことかと思えます。

辛くて寂しくてたまらないから、人の姿を見たら近寄らずにはいられなかったのかもかもしれませんし、それでますます周りの人は彼らから離れていったのでしょう。

そんな絶望的な状況からこの二人を救い出すために、イエス様は誰も近づかないような場所へやって来られたのです。

近寄ってくるイエス様を見て、彼らは叫び声を上げました。「神の子、かまわないでくれ。

まだその時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。」

二人に取り憑いていた悪霊たちは、やがて自分たちが滅ぼされることを知っていました。今はどんなに力を振るっていても、終わりの日には神様がすべての悪を裁かれること。

そして神の子であるイエス様には、今すぐにでも自分たちを追い出す力があることを、悪霊たちは知っていたようです。だから何とかこの場をしのごうと、悪霊たちは知恵を絞りました。

「我々を追い出すのならせめて、あの豚たちに移らせてくれ。」

そう願って、イエス様の許しをもらった悪霊たちは、遠くの豚の群れに移ります。そしてなんと豚たちを崖から湖になだれ込ませて、溺れ死なせてしまいました。どうしてそんなことになったのか、これがどういうことなのか、福音書は何も説明していません。

悪霊たちが神様の裁きから逃げようとして、豚の群れを道連れに滅んでしまったのか。それとも豚たちを隠れ蓑にして、ずる賢くイエス様から逃げていったのか。とにかく悪霊たちは、何が何でもイエス様と関わりたくなかったんでしょう。

驚いたのは、その豚の群れを飼っていた人たちでした。豚たちがいっせいに崖を下って、湖に飛び込んで次々に溺れていく。そんな異様な光景を見て、彼らは怖くなってその場を逃げ出して、近くの町に駆け込みました。

豚飼いたちの話を聞いた町の人たちは、さっそくイエス様に会おうとやって来ます。そしてイエス様の姿を見るや否や、「この地方から出て行ってほしい」と訴えました。

これはなかなか理不尽な反応だと思います。豚飼いたちは、豚が海に飛び込んだことだけじゃなくて、悪霊に取り憑かれていた二人に何が起こったかまで、町の人々に話していました。あの二人が悪霊から解放されて、困っていた自分たちの状況が変えられた。

「ああ、良かった！」と喜んでいいはずのことを、イエス様はなさったんです。

でも人々の心に湧き上がったのは、「どうしたことだ、怖い！」という感情でした。自分たちの日常が崩された、思いがけないことを起こされてしまった。そのことに、人々は何よりもまず不安で怖くなってしまったんです。

悪霊に取り憑かれていた二人の辛さや悲しさや寂しさは、他の人たちにとってはもう日常の一部になっていたのでしょう。かわいそうだけど、どうしようもない。なるべく距離をとって刺激しないように、迷惑をかけられないように、このままでうまくやっていこう。

そんな自分たちなりのバランスを、イエス様に崩されてしまった。そんな風に感じたのではないかと思います。しかも、この地方の人たちにとっては、豚の群れは大事な財産のひとつでした。苦しみ続けてきた二人がやっと救われた、という喜びよりも。日常を崩されて、自分たちの財産が損害を受けた、という被害者意識のほうが大きかったのかもしれない。これ以上イエス様が一緒にいたら、何が起きるかわからない。自分たちの日常も、もしかし

たら自分たち自身も、変えられてしまうかもしれない。怖い、関わりたくない、かまわないでくれ。そう言わんばかりの態度は、あの悪霊たちの言葉とどこか重なります。

神の子、かまわないでくれ。

まだその時じゃないのに、どうして私たちのところにやって来て、私たちを苦しめるんだ。この悪霊たちの言葉と、「ここから出て行ってもらいたい」という町の人たちの言葉は、同じ響きをもっていました。

そして、それはきっと彼らだけの話ではありません。イエス様、あなたがなさったことは確かにすごいですけれど、私にはありがた迷惑です。放っておいてください、関わらないでください、今の私を変えないでください！そう叫んで、私たちは自分の日常からイエス様を追い出そうとしている時があるのではないのでしょうか。

<怖くなるほどの救い>

イエス様が起こされる救いの出来事は、時に私たちを驚かせて、不安にします。

「どうしようもない」と思うところは諦めて、何とか自分たちでバランスを取っていたのに、それをガシャンと崩されてしまうことだってあるでしょう。

仕方ない、これでいいんだ、こうなるのが当たり前だ。そう思ってやり過ごしている私たちの常識や日常の中に、イエス様の働きは「どうしたことだ、怖い！」と叫びたくなるような出来事を引き起こすものです。そもそも、イエス様がお生まれになった時だって、そうでした。

この世界のすべてを創られた神様の御子が、弱さも限界もある一人の人間としてお生まれになりました。

「どうして、よりによってこんなところで？」と思わずにはいられない、ベツレヘムの家畜たちの居場所で、神様の独り子は誕生しました。

「どうしてこの人たちが？」と思えるような、ごく普通のユダヤ人の若いカップルが、神様の御子を産んで育てることになりました。

「どうしてこの人たちに？」と思われる人たち、羊飼いや外国の学者たちに、まっ先にイエス様の誕生は伝えられました。救い主が生まれたという知らせは、当時のイスラエルを治めていたヘロデ王を不安にさせて怖がらせて、彼を赤ん坊殺しに駆り立てました。

神様が私たち人間を救おうとなさる時に、私たちの常識や価値観や日常は、多かれ少なかれ揺さぶられて、変えられてしまいます。変わらずには済まないぐらいに、私たちは神様から離れようとする罪を絡みつかせて、お互いにもつれさせながら、生きているものですから。悪霊に取り憑かれた、あの二人のように。彼らを遠ざけて関わらないようにしていた、周りの人たちのように。

自分たちではどうしようもない状況の中で、せめてお互いを諦めて関わらないでいることで、何とかバランスを取っている。そんな私たちすべての人を救い出すために、イエス様は天から地上へ、神様から人間へ、大きな隔たりを渡って、私たちの世界にやって来られました。

私たちの罪がもたらす苦しみと孤独を、十

字架の上で代わりに引き受けてくださいました。

その死と復活によって、私たちは本来の人間の生き方を、神様と一緒に生きる命を生きられるようになりました。

「どういうことだ、怖い！」と叫びたいくなるような救いの出来事が、私たち一人一人を悲しみから喜びへ、苦しみから平安へ、孤独から神様の愛へ連れ戻すのです。

かつて旧約聖書の預言者イザヤを通して、神様はこう宣言されました。

「見よ、新しいことをわたしは行う。

今や、それは芽生えている。

あなたたちはそれを悟らないのか。

わたしは荒れ野に道を敷き、

砂漠に大河を流れさせる。」

(イザヤ43:19)

この約束のとおり、神様は私たちの思いを超える新しいことを行われました。

神様の御子は人間になって、私たちの間で生きて働かれて、私たちの言葉で語って、私たちに神様の愛を伝えて、新しい命を与えてくださいました。荒れ野に道が敷かれて、砂漠に大河が流れるように。神様からの救いは今も私たちの常識を超えて、私たちの日常の中で起こされ続けています。

町の人たちにとっては「関わりたくない」と思えたイエス様の出来事も、悪霊から救い出されたあの二人にとってはきっと、人生を変える喜びの出来事でした。

私たちにとっては思いがけない、怖くて不安で理不尽に思える出来事の中からも、神様は人生を変えるほどの喜びを芽生えさせてくださる御方です。荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせるように。

神様は怖くなるほどの救いを、私たちの真っただ中で引き起こされるのです。この救いを知らされた者として。

日常の中で出会わされる「怖い」の先に、それでも神様が何か新しい喜びを引き起こしてくださる、この希望を抱いて生きるように。

怖くなるほどの救いの喜びを伝えるようにと、イエス様が今日も私たちをそれぞれの日常へと送り出しておられます。

さあ行きましょう、神様がこれから引き起こしてくださる、怖くなるほどの救いに期待して。 お祈りいたします。